

一夜

夏目漱石



「美しくしき多くの人の、美しくしき多くの夢を……」と髯ある人が
二たび三たび微吟びぎんして、あとは思案の体である。灯ひに写る床柱とこぼしら
にもたれたる直き背なおせの、この時少しく前にかがんで、両手に抱いだ
く膝頭ひざがしらに陰けわしき山が出来る。佳句かくを得て佳句を続つぎ能あたわざるを
恨うらみてか、黒くゆるやかに引ける眉まゆの下より安からぬ眼の色が
光る。

「描えがけども成らず、描えがけども成らず」と椽えんに端居はしいして天下晴れ
て胡坐あぐらかけるが繰り返す。兼ねて覚さえたる禅語ぜんごにて即興なれば
間に合わすつもりか。剛こわき髪を五分ぶ分に刈りて髯貯たくわえぬ丸顔を傾
けて「描えがけども、描えがけども、夢なれば、描えがけども、成なりりがたし」
と高らかに誦じゆし了おわつて、からからと笑いながら、室へやの中なる女
を顧かえりみる。

竹籠たけかごに熱き光りを避けて、微かすかにともすランプを隔へてて、右手に違い棚、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましよ。女ならば絹わくを枠わくに張はつて、縫ぬいいととりましよ」と云いながら、白地の浴衣ゆかたに片足くすをそと崩くずせば、小豆皮あずきがわの座布団ざぶとんを白すべき甲あが滑すべり落ちて、なまめかしからぬほどは艶えんなる居ゐずまいとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝抱ひざいだく男が再び吟うたじ出すあとにつけて「縫ぬいいにやとらん。縫ぬいいとらば誰たれに贈くらん。贈くらん誰たれに」と女は態わざとらしからぬ様さまながらちよと笑わらう。やがて朱塗しゆぬの団扇うちわの柄えにて、乱みだれかかる頬ほおの黒髪くろかみをうるさしとばかり払はえば、柄えの先さきにつけたる紫むらのふさが波なみを打うつて、緑り濃こき香油かほの薫かほりの中なかに躍おどり入いる。

「我われに贈くれ」と髯ひげなき人が、すぐ言い添そえてまたからからと笑

う。女の頬には乳色の底から捕えがたき笑の渦が浮き上つて、
瞼にはさつと薄き紅を溶く。

「縫えばどんな色で」と髻あるは真面目にきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする
虹の糸、夜と昼との界なる夕暮の糸、恋の色、恨みの色は無論
ありましょ」と女は眼をあげて床柱の方を見る。愁を溶いて鍊
り上げし珠の、烈しき火には堪えぬほどに涼しい。愁の色は昔
しから黒である。

隣へ通う路次を境に植え付けたる四五本の檜に雲を呼んで、
今やんだ五月雨がまたふり出す。丸顔の人はいつか布団を捨て
て椽より両足をぶら下げている。「あの木立は枝を卸した事が
ないと見える。梅雨もだいぶ続いた。よう飽きもせず以降るの」
と独り言のように言いながら、ふと思ひ出した体にて、吾が膝頭

を丁々と平手をたてに切つて敲く。「脚気かな、脚気かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちよと解しがたき話しの緒をたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美しくしかろ」と男が云えば「せめて夢にでも美しくしき国へ行かねば」とこの世は汚れたりと云える顔つきである。「世の中が古くなつて、よごれたか」と聞けば「よごれました」と紈扇に軽く玉肌を吹く。「古き壺には古き酒があるはず、味いたまえ」と男も鷺鳥の翼を畳んで紫檀の柄をつけたる羽団扇で膝のあたりを払う。「古き世に酔えるものなら嬉しかろ」と女はどこまでもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」としきりにわが足を玩べる人、急に膝頭をうつ手を挙げて、叱と二人を制する。三人の聲が一度に途切れる間をククーと鋭どき鳥が、檜の上枝を掠めて裏の

禪寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほととぎすか」と羽団扇を棄ててこれも椽側へ這い出す。見上げる軒端を斜めに黒い雨が顔にあたる。脚気を気にする男は、指を立てて坤の方をさして「あちらだ」と云う。鉄牛寺の本堂の上あたりでククー、ククー。

「一声でほととぎすだと覚る。二声で好い声だと思つた」と再び床柱に倚りながら嬉しそうに云う。この髯男は杜鵑を生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に恥ずかすと云う気色も見えぬ。五分刈は向き直つて「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞えるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚氣らしい」と拇指で向脛へ力穴をあけて見る。「九切の上に一簣を加える。加えぬと足らぬ、加えると危うい。思う人には逢わぬがました

ろ」と羽団扇がまた動く。「しかし鉄片が磁石に逢うたら？」「はじめで逢うても会釈はなかる」と拇指の穴を逆に撫でて澄ましている。

「見た事も聞いた事もないに、これだなと認識するのが不思議だ」と仔細らしく髯を撚る。「わしは歌麻呂のかいた美人を認識したが、なんと画を活かす工夫はなかるか」とまた女の方を向く。「私には——認識した御本人でなくては」と団扇のふさを織い指に巻きつける。「夢にすれば、すぐに活きる」と例の髯が無造作に答える。「どうして?」「わしのはこうじゃ」と語り出そうとする時、蚊遣火が消えて、暗きに潜めるがつと出でて頸筋にあたりをちくと刺す。

「灰が湿っているのか知らん」と女が蚊遣筒を引き寄せて蓋をとると、赤い絹糸で括りつけた蚊遣灰が燻りながらふらふらと

揺れる。東隣で琴と尺八を合せる音が紫陽花の茂みを洩れて手にとるように聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯さえちらちら見える。「どうかな」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しがまた元へ返る。火をつけ直した蚊遣の煙が、筒に穿てる三つの穴を洩れて三つの煙となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの煙りが蓋の上に塊まつて茶色の球が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯と来て吹き散らす。塊まらぬ間に吹かるときには三つの煙りが三つの輪を描いて、黒塗に蒔絵を散らした筒の周囲を遶る。あるものは緩く、あるものは疾く遶る。またある時は輪さえ描く隙なきに乱れてしまう。「茶毘だ、茶毘だ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。「蚊の世界も楽じゃなかる」と女は人間を蚊に比較する。

元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中はすべてこれだと疾うから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍らにある羊皮の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙を薄く削った紙小刀が挟んである。巻に余つて長く外へ食み出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖で触ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「こう湿気てはたまらん」と眉をひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂の先を握って見て、「香でも焚きましょか」と立つ。夢の話しはまた延びる。

宣徳の香炉に紫檀の蓋があつて、紫檀の蓋の真中には猿を彫んだ青玉のつまみ手がついている。女の手がこの蓋にかかった

とき「あら蜘蛛が」と云うて長い袖が横に靡く、二人の男は共に床の方を見る。香炉に隣る白磁の瓶には蓮の花がさしてある。昨日の雨を蓑着て剪りし人の情けを床に眺むる蒼は一輪、卷葉は二つ。その葉を去る三寸ばかりの上に、天井から白金の糸を長く引いて一匹の蜘蛛が——すこぶる雅だ。

「蓮の葉に蜘蛛下りけり香を焚く」と吟じながら女一度に数弁を攫んで香炉の裏になげ込む。「蠨蛸懸不揺、篆煙遶竹梁」と誦して髯ある男も、見ているままで払わんともせぬ。蜘蛛も動かぬ。ただ風吹く毎に少しくゆれるのみである。

「夢の話しを蜘蛛もききに來たのだろ」と丸い男が笑うと、「そうじゃ夢に画を活かす話しじゃ。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の上なる詩集を読む気もなしに開く。眼は文字の上に落つれども瞳裏に映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があつて、百二十個の灯笼とうろうをつける。百二十間の廻廊に春の潮うしおが寄せて、百二十個の灯笼が春風しゅんぷうにまたたく、おぼろ朧の中、海の中には大きな華表とりいが浮かばれぬ巨人の化物ばけもののごとくに立つ。……」

折はげから烈べルしき戸鈴の響がして何者か門口かどぐちをあける。話し手ははたと話をやめる。残るはちよと居ずまいを直す。誰も這入はいつて来た気色けしきはない。「隣だ」と髻ひげなしが云う。やがて洩蛇しよじやの目を開く音がして「また明晩」と若い女の声がする。「必ず」と答えたのは男らしい。三人は無言のまま顔を見合せて微かすかに笑う。「あれは画じゃない、活きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「しかしあの声は?」「女は藤紫」「男は?」「そうさ」と判じかねて髯が女の方を向く。女は「緋ひ」と賤いやしむごとく答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸つて、その二百三十二枚目の額に画かいてある美人の……」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな单调な声じゃない。色には直なおせぬ声じゃ。強しいて云えば、ま、あなたのような声かな」

「ありがとう」と云う女の眼の中うちには憂をこめて笑の光が漲みなぎる。

この時よいずくよりか二疋ひきの蟻ありが這はい出して一疋は女の膝ひざの上に攀よじ上のぼる。おそらくは戸迷とまじいをしたものである。上がり詰さめた上には獲物えものもなく下り路くだをすらすら失うた。女は驚ろいた様さまもなく、うろろろする黒きものを、そと白き指で軽く払い落す。落されたる拍子ひょうしに、はたと他の一疋と高麗縁こうらいべりの上で出逢であう。しばらくは首と首を合せて何かささやき合えるようであったが、

このたびは女の方へは向わず、古伊万里の菓子皿を端まで同行して、ここで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。髯なき男がやがて云う。

「八畳の座敷があつて、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上つた美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が斉しく笑う。一疋の蟻は灰吹を上りつめて絶頂で何か思案している。残るは運よく菓子器の中で葛餅に邂逅して嬉しさの余りか、まごまごしている気合だ。

「その画にかいた美人が？」と女がまた話を戻す。

「波さえ音もなき朧月夜に、ふと影がさしたと思えばいつの間にか動き出す。長く連なる廻廊を飛ぶにもあらず、踏むにもあらず、ただ影のままにて動く」

「顔は」と髻なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾とくにやんで新たなる一曲を始めたと見える。あまり旨うまくはない。

「蜜を含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭麝らんじやでも焚たき込めばなるまい」これは女の申し分だ。三人が三様さんようの解釈をしたが、三様共すこぶる解しにくい。

「珊瑚さんごの枝は海の底、葉を飲んで毒を吐く軽薄の児じ」と言いかけて吾に帰りたる髻が「それぞれ。合奏より夢の続きが肝心かんじんじゃ。

——画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描えがけども成らず、描えがけども成らず」と丸き男は調子をとりて軽く銀ぎん腕わんを叩たたく。葛餅かもちを獲えたる蟻あまはこの響こきに度を失して菓子腕かみの中なかを右左みぎひだりりへ馳かけ廻まわる。

「蟻の夢が醒さめました」と女は夢を語る人に向つて云う。

「蟻の夢は葛餅か」と相手は高からぬほどに笑う。

「抜け出ぬか、抜け出ぬか」としきりに菓子器を叩くは丸い男である。

「画から女が抜け出るより、あなたが画になる方が、やさしゅう御座んしょ」と女はまた髯にきく。

「それは気がつかなんだ、今度からは、こちが画になりましよ」と男は平気で答える。

「蟻も葛餅にさえなれば、こんなに狼狽うろたえんでも済む事を」と丸い男は腕をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻を鷹揚おうようにふかしている。

五月雨さみだれに四尺伸びたる女竹めだけの、手水鉢ちようずばちの上に蔽おほい重なりて、余れる一二本は高く軒せまに逼れば、風誘うたびに戸袋えんをすつて椽えんの

上にもはらはらと所^{えら}扱^{えら}ばず緑りを滴^{したた}らす。「あすこに画がある」と葉巻の煙をぷつとそなたへ吹きやる。

床柱^{とこばしら}に懸^かけたる払子^{ほつす}の先には焚^たき残る香^{こう}の煙りが染^しみ込んで、軸^{じやくちゆう}は若冲^{ろがん}の蘆雁^{ろがん}と見える。雁^{かり}の数は七十三羽、蘆^{あし}は固^{もと}より数えがたい。籠^{かご}ランプの灯^ひを浅く受けて、深き三尺の床^{とこ}なれば、古き画のそれと見分けのつかぬところに、あからさまならぬ趣^{おもむき}がある。「ここにも画が出来る」と柱に靠^よれる人が振り向きながら眺^{なが}める。

女は洗えるままの黒髪を肩に流して、丸張りの絹^{きぬ}団扇^{うちわ}を軽^{かろ}く揺^{ゆる}がせば、折々は鬢^{びん}のあたりに、そよと乱るる雲の影、収^こまれば淡^{まゆ}き眉^{まゆ}の常よりもなお晴れやかに見える。桜の花を砕いて織り込める頬の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて「私^{わたし}も画^えになりましょか」と云う。はきと分らねど白^{くす}地に葛^{くす}の葉を

一面に崩して染め抜きたる浴衣ゆかたの襟えりをここぞと正せば、暖かき大理石にて刻きざめるごとき頸筋くびすじが際立きわたちて男の心を惹ひく。

「そのまま、そのまま、そのままが名画じゃ」と一人が云うと
「動くと言が崩れます」と一人が注意する。

「画になるのもやはり骨が折れます」と女は二人の眼を嬉しがらしようとせせず、膝に乗せた右手をいきなり後うしろへ廻まわして体をどうと斜そめに反そらす。丈長たけき黒髪がきらりと灯ひを受けて、さらさらと青畳あざわに障さわる音さえ聞える。

「南無三、好事こうず魔多し」と髯ある人が軽かろく膝頭かたを打つ。「刹那せつなに千金を惜しまず」と髯なき人が葉巻の飲のみ殻がらを庭先たにへ抛たきつける。隣りの合奏はいつしかやんで、樋ひを伝つう雨点うてんの音のみが高く響く。蚊遣かやりび火はいつの間まにやら消えた。

「夜もだいぶ更ふけた」

「ほととぎすも鳴かぬ」

「寝ましょか」

夢の話しはつい中途で流れた。三人は思い思いに臥床ふしどに入る。三十分の後のち彼らは美しくしき多くの人の……と云う句も忘れた。ククーと云う声も忘れた。蜜を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻はいの灰吹ふきを攀よじ上のぼった事も、蓮はすの葉に下りた蜘蛛くもの事も忘れた。彼らはようやく太平に入る。

すべてを忘れ尽したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髪ぬしの主である事を忘れた。一人の男は髻のある事を忘れた。

他の一人は髻のない事を忘れた。彼らはますます太平である。

昔むかし阿修羅あしゆらが帝釈天たいしゃくてんと戦つて敗れたときは、八万四千の眷属けんぞくを領して藕糸孔ぐうしこう中ちゆうに入いつて蔵かくれたとある。維摩ゆいまが方丈の室に法を聴ける大衆は千か万かその数を忘れた。胡桃くるみの裏うちに潜ひそんで、

われを尽大千世界の王とも思わんとはハムレットの述懐と記憶する。粟粒芥顆ぞくくりゆうかいこのうちうちに蒼天そうてんもある、大地もある。一世師いつせいに問うて云う、分子ぶんしは箸はしでつまめるものですかと。分子はしばらく措おく。天下は箸の端さきにかかるのみならず、一たび掛け得れば、いつでも胃の中に収まるべきものである。

また思う百年は一年のごとく、一年は一刻のごとし。一刻を知ればまさに人生を知る。日は東より出でて必ず西に入る。月は盈みつればかくる。いたずらに指を屈して白頭いたに到るものは、いたずらに茫々ぼうぼうたる時に身神を限らるるを恨うらむに過ぎぬ。日月は欺あざむくとも己れを欺くは智者とは云われまい。一刻に一刻を加うれば二刻と殖ふえるのみじゃ。蜀川しよくせん十様の錦、花を添えて、いくばくの色をか変ぜん。

八畳の座敷に髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼の女が

会して、かくのごとく一夜を過した。彼らの一夜を描いたのは
彼らの生涯を描いたのである。

なぜ三人が落ち合った？ それは知らぬ。三人はいかなる身分と素性と性格を有する？ それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？ 人生を書いたので小説をかいたのでないから仕方がない。なぜ三人とも一時に寝た？ 三人とも一時に眠くなつたからである。

(三十八年七月二十六日)

一夜

底本：「夏目漱石全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 10 月 27 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

※底本本文では、「※ [# 「虫+ (くさかんむり／嘯のつくり)」、第 4 水準 2-87-94] 蛸《しょうしょう》」は、「虫+嘯のつくり」とつくつてある。しかし、底本の注記では、つくりにくさかんむりのある「※ [# 「虫+ (くさかんむり／嘯のつくり)」、第 4 水準 2-87-94]」が用いられている。下記の異本とも照合の上、当該の箇所は「※ [# 「虫+ (くさかんむり／嘯のつくり)」」で入力した。

「倫敦塔・幻影の盾」岩波文庫、岩波書店

1930（昭和 5）年 12 月 20 日第 1 刷発行

1990（平成 2）年 4 月 16 日第 23 刷改版発行

1997（平成 9）年 9 月 5 日第 30 刷発行

「倫敦塔・幻影の盾」新潮文庫、新潮社

1952（昭和 27）年 7 月 10 日初版発行

1968（昭和 43）年 9 月 15 日 20 刷改版発行

1997（平成 9）年 4 月 25 日 69 刷発行

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000 年 9 月 11 日公開

2004 年 2 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。